

日本史学

◇教員◇

教授 鈴木淳、高橋典幸、牧原成征、三枝暁子

准教授 村和明、稲田奈津子

助教 杉田建斗

◇学生◇

学部 52名 修士課程 22名 博士課程 34名

(1) 日本史学の特質

日本史学は、日本列島およびその周辺の過去の歴史について、多様な側面から総合的に考究しようとする専門分野である。研究の基礎は、古文書・記録・史書・年代記などの文献史料を、正確に読み、内容を批判的に検討し、そこから歴史の文脈や展開を明らかにする論点を引き出すことにあり、その上に立ってあらたな歴史像を構成することがめざされる。したがって、当研究室の教育・研究システムも、そうした歴史研究の力量を養成することを中心に組み立てられている。

演習では、古代・中世・近世・近現代の各時代の歴史理解にとって不可欠の文献史料を原文に即して解読する、あるいは、それらの史料を使って書かれた先学の優れた研究・論文（外国語で書かれたものを含む）を批判的に検討する、といったことが中心的な内容となる。講義では、各教員が行っている先端的な研究の内容をかみくだいて話すことになるが、その場合でも、**<史料をしていかに歴史を語らせるか>**を軸とする講義が多い。

一方、日本史学が対象とする歴史資料は、文献のみではなく、絵画や文学を始めとする芸術作品、発掘調査の成果としての遺跡や遺物、習俗や民俗行事、地図や地名などと、広がりを見せている。それらをめぐっては、専門的には、美術史学・国文学・考古学・民俗学・建築史学・歴史地理学などの諸学問領域があるが、日本史学の側からも、これらの歴史資料を再検討し、あらたな歴史像の提示や問題提起を行うようになってきている。

当研究室の学生も、文献史料に対する専門的能力をしっかりと踏まえた上で、できる限り広範な歴史資料を対象として取り上げる姿勢が望まれる。

(2) 教員の自己紹介

現在の当研究室の専任教員は6名、助教1名である。時代ごとの専門性を考慮して、古代・中世・近世・近現代に2名ずつという構成であったが、現在は古代、近代が1名となっている。時代区分はあくまで便宜的なものであり、時代の枠を超えて積極的に発言しあう気風がある。

鈴木淳は、**明治期の社会経済史**が専門である。課程博士論文を書籍とした『明治の機械工業』（ミネルヴァ書房）がある。その後、機械を中心とした新技術の導入、活用を軸として日本近代史を展望しようと試みており、駒場での授業内容を基にした『日本の近代15 新技術の社会史』（中央公論新社）、『日本の歴史20 維新の構想と展開』（講談社）を執筆した。他に『関東大震災』（講談社学術文庫）、編著に『工部省とその時代』（山川出版社）、『経済の維新と殖産興業』（ミネルヴァ書房）などがある。近年は本学の百五十年史編纂にも取り組んでいる。演習では、夏学期に論文を読んで日本近代史の学術論文のあり方を学び、冬学期には学生が史料に基づいた研究発表をする。

高橋典幸は、**中世史**を専攻している。武家政権の組織、とくに鎌倉幕府の御家人制に注目し、軍事制度の側面からその特質にアプローチしているが、近年は社会的・地域的側面にも関心を向け、続く室町幕府の成立過程・特質も検討課題としている。講義ではその成果もふまえて武家社会について広く論じ、かつ古文書学についても概説する。演習では鎌倉幕府の歴史書である『吾妻鏡』を講読し、史料読解の基礎の習得をめざす。著書に『鎌倉幕府軍制と御家人制』（吉川弘文館）等がある。

牧原成征は、**近世史**を専攻している。身分制・土地制度・商品流通などを研究テーマとし、百姓・町人・武士・奉公人・かわた身分など、当時の人々のあり方や、彼らが形づくった社会と国家の特質について追究している。講義ではそれらの一端を提示・紹介し、演習では報告者が任意の地域をとりあげて、そこで見られる諸問題について史料を読み解き、論点を展開・総合してゆく方法を考える。著書に『近世の土地制度と在地社会』（東京大学出版会）、『日本近世の秩序形成 村落・都市・身分』（同）等がある。

三枝暁子は、**中世史**を専攻している。主に京都の寺社史料を素材として、寺院社会および都市社会の構造について分析をすすめている。具体的には、中世の「寺社勢力」を代表する位置にあった比叡山延暦寺、およびその末社の史料を分析しながら、13世紀以降に進展する寺社の領主支配や集団編成等について検討している。講義では、その成果をふまえて、都市に現出する諸集団の社会的位置づけについて論じる。また演習では、『北野社家日記』を読み解きながら、15世紀後半の都市社会について考える。著書に『比叡山と室町幕府一寺社と武家の京都支配—』（東京大学出版会）等がある。

村和明は、**近世史**を専攻している。特に天皇・朝廷、豪商三井家を主な分析対象とし、権力構造の変遷や大組織の制度化の過程、これらと密接に関連する史料論について考えている。著書に『近世の朝廷制度と朝幕関係』（東京大学出版会）がある。講義では、具

体的な史料や先行研究に即して、広義の政治史の発想・手法を概説する。演習では、政治史史料の正確な読解を目指す。

稲田奈津子は、**古代史**を専攻する。中国・朝鮮との比較の視点から、葬送儀礼や金石文を中心に検討しており、近年はジェンダー史にも関心を寄せている。著書に『日本古代の喪葬儀礼と律令制』（吉川弘文館）、共編著に『黄泉の国との契約書—東アジアの買地券』（勉誠出版）、『東アジアの後宮』（勉誠出版）等がある。講義では儀礼史研究の一端を論じ、演習では撰開期の史料読解を通じて平安貴族社会を読み解いていく。

また、以上の専任教員以外にも、史料編纂所や他学部・他大学の教員の方を講師として招き、特徴ある魅力的な講義を開講していただいている。

（3）研究室と史料編纂所

研究室は、法文2号館の1-4階に「散在」しているが、その中核は1階東南の隅にある。ここには助教と副手がおり、また学生・大学院生から教員まで、全構成員の「溜まり場」となっている。研究室はきわめて開放的であり、教員はもちろん、助教や先輩の大学院生からも懇切な指導や助言を受けることができる。

研究室図書は、日本・世界においてもっとも充実した規模の日本史関連図書を所蔵している。ただし、法文2号館1・2・4階研究室や文学部2・3号館図書室、史料編纂所1階日本史学研究室などに分散配置されており、求める時代・分野の図書のありかを知るには多少の「慣れ」が必要である。



研究室の書棚

授業以外にも、ゼミ旅行や史料調査、各種の研究会・勉強会などが活発に行われており、これらを介して多様な学習の機会を得ることができる。研究室全体の行事としては、4月の進入学生歓迎会、5月の卒論相談会やインスペクション（研究室蔵書の点検）、2月の卒業論文口述試験後の予餞会などがあり、ソフトボール大会を開催することもある。研究室メンバーの研究成果を発表する媒体として、史料の調査・研究を中心とする論文・翻刻・解説などで構成される『東京大学日本史学研究室紀要』（年1回刊）が、研究室の編集により刊行されている。

また、当研究室と歴史的に関係の深い部局として、東京大学史料編纂所がある。史料編纂所は、『大日本史料』『大日本古文書』などの史料集の編纂や広範な史料情報の集積・再編成・公開事業を行っている研究機関で、古代から近代初頭に至る膨大な史料を原本・影写本・写真版その他の形で所蔵している。当研究室の学生は、所定の手続きを行って、これらの史料を閲覧することができる。同所はまた、多くの優れた日本史研究

者を擁しており、当研究室の教員と相談の上で、同所の教員から指導を仰ぐこともできる。

(4) 進学から卒業まで

本研究室は、文学部での専門教育への導入として、**教養学部2年次**に「**日本史学研究入門**」という講義2つを毎年開いている。日本史学への進学希望者は、ぜひ受講して欲しい。

3年に進学すると、**高度の専門教育**を受けることになる。はじめから時代や分野を狭く限定せずに、他専攻の講義を受けたり複数のゼミに参加したりするなど、できるだけ幅広い学習の場をもつよう心がけてほしい。4年次には卒業論文作成に多くのエネルギーを投入することになるので、3年の間に多くの単位を取得しておくといい。

4年になると、**卒業論文の作成**が最重要課題となる。例年5月に研究室の卒論相談会が開かれ、このころを目途に専攻分野やテーマを確定し、研究計画を作成することになる。研究テーマの選定にあたっては、日本史学の範囲内で各自の自由が尊重される。演習などで日ごろから教員や先輩に接触して学習を積み重ねていけば、それほど無理なく自分のテーマを見つけることができよう。

卒論研究は、ほとんどの学生にとってはじめての、そしてもしかしたら人生において一度限りの、学術論文作成の機会となる。日本の歴史に埋もれた無限といってもよい研究対象＝史料・歴史資料と格闘し、先行研究との対話をくりかえし、自分だけの固有の論点を発見し、それを説得力ある論文に結晶させることができるかどうか、ここでは試される。こうした経験は、卒業後すぐ就職して社会に巣立つ学生にとっても、かけがえのない財産になるはずである。

卒業後も専門研究を続けたい学生は、試験を経て大学院に進学し、研究者や専門家などへの途をめざすことになる。例年、卒業生の多くは就職の途を選ぶ。就職先はマスコミ・出版・公務員・銀行・メーカー・コンサルタントなど多様であり、文学部全体の傾向と変わらない。